

# コロナ禍における大学生の地域の中での学び

奥田 雄一郎

## キーワード

コロナ禍における大学生 地域の中での学び 地域で学ぶことの意味 地域愛着

## 要旨

本論文は、コロナ禍における「大学生の地域の中での学び」についての報告である。2021年度、コロナ禍における地域の中で行われたイベント・活動の中から2種のイベント・活動を対象に、大学生らが何を行い、その中で何を学んだのかを検討した。具体的には2021年6月から11月にかけて前橋タイニーマーケット、中之条ビエンナーレという2種6回のイベントを紹介し、イベントの中での大学生らによる具体的な活動や特徴について紹介した。地域におけるイベントや活動を経て、学生たちのリフレクションからは1. コロナ禍における学生生活、2. 地域に関わることの意味、3. 地域の中での学び、4. 地域への愛着の形成、の4つの特徴が見られた。1. コロナ禍における学生生活においては、状況の変化によるネガティブな影響も見られたものの、一方でその状況をポジティブに捉えるものも見られた。2. 地域に関わることの意味については多くの学生たちがはじめは大学外の地域に関わることに對して積極的な意味を見出せていなかったものの、実際の活動や上級生と関わる中でその意味を理解し、態度を変化させていく姿が見られた。3. 地域の中での学びについては一様ではなく、学生によって様々な学びを経験しており、上級生においては学びを将来へと接続しているものも見られた。最後に4. 地域への愛着の形成においては、地域での活動を経ることによりその地域が自身にとって意味のある場へと変化し、愛着が形成されていくプロセスが見られた。

## 1 はじめに

2019年の終わりに始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な感染拡大の影響は、大学生たちの学びを大きく変化させるものとなった。多くの大学においては2020年度の授業の多くが急遽オンラインへと移行することとなり、それまで奥田（2018, 2019）などにおいて行なってきたフィールドワークやサービスラーニングと呼ばれる地域の中での学び（奥田ら, 2016）は、大きな制約を受けることとなった。しかしながら、そうしたきびしい状況においても感染の波が収束したわずかな機会などを活かし、研究室に所属する大学3・4年生らと共に地域でのイベントや活動を実践した。本論はそうしたコロナ禍における大学生の地域の中での大学生の学びを記録したものである。

## 2 本論の対象とした「地域でのイベント・活動」

2021 年度、当初計画していた地域での活動の多くは、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大によって中止となってしまった。しかしながら、コロナ禍以前の 2019 年度と比べればその数は大きく減少したものの、医療従事者への支援を目的としたクラウドファンディング（地域の企業との協働）や地域在住のアーティストのインсталレーション政策協力やイベントへの参加などをはじめ、2020 年度と比較すれば 2021 年度は多くの地域での活動を行うことができた。

本論においてはそうした地域での大学生らの活動の中から、コロナ禍において学生たちが複数回継続して参加ができたものとして前橋タイニーマーケット、中之条ビエンナーレの 2 つのイベントにおける学生たちの活動と学びの事例を取り上げる。

### 2-1. 前橋タイニーマーケット

前橋タイニーマーケットは、2019 年 12 月から群馬県前橋市中心市街地において毎月最終日曜日に開催され、野菜の販売やワークショップ、これから始める・始めたばかりの飲食店など 3・4 団体程度が参加する、生産者と消費者、参加者と参加者といった人と人のコミュニケーションを大切にすることをコンセプトとした小規模のマーケットである。2020 年度においてはコロナ禍の中 1 回のみとなってしまったものの、学生たちは 8 月に「No 密ワークショップ」という、コロナ禍での大学生の学びをテーマとしたワークショップを行った。

本論が報告する 2021 年度においては、当初は 4・6・7・9・10・11・12 月の開催が予定されていたが 9 月は緊急事態宣言のため中止となり、6・7・10・11・12 月の 5 回に渡り学生たちがワークショップなどのイベントを行なった。

### 2-2. 中之条ビエンナーレ

中之条ビエンナーレは、2007 年から群馬県吾妻郡中之条町において 2 年毎に開催されている地域芸術祭である。中之条町の廃校や温泉街などの自然の環境を利用し、100 組以上のアーティストらが作品展示や演劇、身体表現などのパフォーマンスやワークショップなどを展開する。

2020・2021 年度においては世界で多くの芸術祭が中止となる中で、中之条ビエンナーレは緊急事態宣言を避け、当初の開始時期を延期して 2021 年 10 月 15 日・11 月 14 日の間で開催された。本研究室は県内の複数の大学研究室（奥西, 2018 など）と共に「町民アートプロジェクト」という地元の多様な団体が参加する枠への参加を打診された。当初は 9 月に 4 回の参加を予定していたが、会期の変更に伴い 10 月 15 日、11 月 12 日の 2 日間において研究室の 3・4 年生たちが実際に中之条町イサマムラへ赴き、「コロナのあとのだいがく」というワークショップイベントを行った。

### 3 イベント・活動内容の概要

Table 1 に示したように、2021 年度の活動は 6 月から 11 月までに渡る全 6 回の活動であった。以下にその概略を時系列順に述べる。

Table 1 2021 年度における研究室による地域でのイベントと活動

	前橋タイニーマーケット	中之条ビエンナーレ
6月	○	
7月	○	
10月	○	○
11月	○	○
12月	○	

#### 3-1. 前橋タイニーマーケット第 1 回：6 月 27 日

2021 年度 6 月の前橋タイニーマーケットへの参加は、4 年生たちにとっては昨年 8 月から数ヶ月ぶりの、3 年生たちにとって研究室に所属してから初めての大学外の地域における活動であった。

コロナ禍であるということを第一に考慮し学生や参加者の安全対策や感染対策に最大限の配慮した上で、具体的な活動として前橋中心市街地の商店街において「心理学の授業」と題して、コロナ禍における大学での授業の様子やそこで学ぶ大学生の様子を紹介するというイベントを行った。当日は、感染防止対策を徹底するために全員がマスクをしていたり、人々ができるだけ関わらない工夫を行うなどの対策を行いながらのワークショップとなり、コロナ禍における人々とのコミュニケーションをデザインすることの困難さを改めて学生たちに考えさせるものとなった。



Figure 1 商店街の会場の様子



Figure 2 地域の方々への授業

一方で、商店街の商店の方々や椅子などをお借りしたり、まちなかの人々に授業を行ったりといった対面での直接的なコミュニケーションは、授業のオンライン化により画面越しでの人々との関わりが急激に増えた大学生らにとって、改めて対面でのコミュニケーションの貴重さと重要さを知る機会ともなった。

### 3-2. 前橋タイニーマーケット第2回：7月25日

7月の前橋タイニーマーケットは、研究室単独での出展ではなく、コラボレーションを提案してくださった商店街の呉服店との共同参加という初の参加形式となった点は特筆すべきものであった。「浴衣会議 2021」と題して3・4年生の学生たちが浴衣でワークショップを行うことによって、協力してくださった商店街の呉服店にとっての広告となると同時に、彼らの存在自体が商店街の活性化につながることをねらいとした。具体的には、研究室での教育心理学におけるアクティブラーニングについての学びや研究を活かし、浴衣を接点としてまちなかの人々と大学生たち間をつなぎ、ハイブリッド（山住・エンゲストローム、2008）やコンタクトゾーン（Pratt, 1992）を形成することを目的とした。



Figure 3 会場の様子



Figure 4 付箋やスライドを用いたワークショップ

商店街での活動は今年度2回目となり感染対策やワークショップの際のオペレーションについては3年生たちも慣れてきたもの、一方で地域の方々をどのように自分たちの活動に巻き込み参加してもらうのか、人々間のコミュニケーションをどのようにデザインし、人々をつなぎ、自分たちも人々とつながっていくのかという点が次回以降への課題として残された。

### 3-3. 中之条ビエンナーレ1回目：10月15日

学生たちは6・7月における前橋タイニーマーケットへの参加を経験し、10月には会期が延期されていた中之条ビエンナーレにおいてワークショップを行った。



Figure 5 ワークショップにおける来場者とのコミュニケーション

廃校となった幼稚園を舞台として「コロナのあとのだいがく」と題し、以下の2点の活動を行った。第1に、来場者に向けて学生たちが自らの研究のポスター発表を行うことにより自分たちの研究について知ってもらうこと。第2に、来場者の方々にゼミのディスカッションに参加していただくことで、コロナ禍において大学生たちがどのようなことを経験し、どのようなことに困難を感じ、どのような学びを得たのかについて知っていただくこと。こうした活動を行うことによってこれまでの活動で課題とされていた参加者の巻き込みという課題の解決を試みた。

### 3-4. 前橋タイニーマーケット第3回：10月31日

9月に予定していた前橋タイニーマーケットへの参加は、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言によって中止となり、7月に続く参加は10月開催への参加となった。

3回目となった前橋タイニーマーケットは会場をこれまでの商店街から異なるエリアへと移し、地域におけるコミュニティスペース（ソウワディライト coconomori）における開催となった。



Figure 6 ポスター発表とディスカッション



Figure 7 モノを媒介とした  
コミュニケーション

第3回の前橋タイニーマーケットにおいては、これまでの紹介してきたイベントでも行ってきたポスター発表やディスカッションといった活動に加え、これまで課題としてきた人々をつなぎ、自分たちも地域の人々と関わる際の新たな仕掛けとして、感染対策を十分にとった上で「モノを媒介としたコミュニケーションデザイン」という新たな試みに挑戦した。

具体的には、第3回前橋タイニーマーケットがハロウィン時期のイベントであったことを利用し「かぼちゃな長者」と題した活動を行なった。学生たちは十分な消毒や感染対策をした上で、はじめに準備されたかぼちゃからはじまり、来場者の方々に対してこのかぼちゃと来場者の持ち物との交換の交渉を行い、そこで生み出されるさまざまなモノの記憶についての物語やをヒアリングすることによって、来場者とのコミュニケーションを生成することをめざした活動を行った。



### 3-5. 中之条ビエンナーレ2回目：11月12日

11月には、第2回目となる中之条ビエンナーレ「コロナのあとのだいがく」を行った。当初は4回に渡るイベントを予定していたイベントであったが、先述のように新型コロナウイルスの感染によって、結果としてこの第2回が中之条ビエンナーレにおける学生たちによるイベントの最終回となった。



Figure 8 来場者との関わりの様子



Figure 9 過去・現在・未来  
についてのワークショップ

前回10月に行った上での課題をリフレクションした上で整理し、改めて「コロナ禍におけるゼミの記憶の継承：私たちのこの2年間を風化させない」というテーマを掲げた。新型コロナウイルスのパンデミックによって、大学生たちの学生生活や学びは大きな影響を受けた。しかしながら、感染拡大が収束すると、それまでの大学生たちのコロナ禍での不自由さや葛藤、他のコーホートであれば経験できたかもしれない様々な時間への苦悩が、あたかもはじめから無かったかのように風化されてしまう心配すらあるのではないか。そうした課題意識から改めて今回の「コロナのあとのだいがく」という企画を見直し、これまでの過去やこれからの未来について、来場者の方々と一緒に考えていくためのコミュニケーションの場のリデザインを行った。

### 3-6. 前橋タイニーマーケット第4回：11月28日

同11月には、再び商店街を会場に第4回となる前橋タイニーマーケットに参加した。



Figure 10 ワークショップの様子



Figure 11 商店街での交換

3 回の前橋タイニーマーケットを経て、ここまでは 3・4 年生の協働によって運営してきたイベントを、残りの 2 回は 11 月の回を 3 年生が、12 月の回は 4 年生が担当するものとした。こうした分担をすることによりこれまで常に後輩として活動に関わってきた 3 年生たちが、今度は自分たちで主体的に地域での活動を運営する態度の形成を目的とした。

具体的な活動としては、これまで行ってきた経験を活かし、第 2 回で行ったアクティブラーニングをベースとした「付箋を使ったワークショップ」や、第 3 回におけるかぼちゃな長者をベースとした「モノを媒介としたコミュニケーションデザイン」を行うなど、これまでの活動でのノウハウを活かしたイベントとなった。

### 3-7. 前橋タイニーマーケット第 5 回：12 月 26 日

12 月には 4 年生たちが中心となり、前橋タイニーマーケットへと参加した。今年度最終回となる第 5 回目においては前年完成した地域の新たなランドマークとなるホテルを会場に「前橋へ贈る「卒業前大感謝祭」と題し、4 年間の学びの中でお世話になった地域の方々への感謝をテーマとし展示とワークショップを行った。



Figure 12 学生それぞれの感謝ボックス  
と「前橋の素敵なうわさ」



Figure 13 来場者との  
コミュニケーションの様子

展示は、4 年生それぞれの顔写真を印刷した箱に、これまで 4 年間でお世話になった地域の方々へのコメントをそれぞれ吹き出し型の付箋に記載したものを貼り付け展示した。記載された地域の方々の多くが実際に当日来場され、4 年生たちの感謝をテーマとした展示を見ていただくと同時に、直接感謝を伝えることができた。

加えて、付箋に記載した地域の方々だけではなく当日初めて来場した学生たちや地域の方々に対しても、人々と地域とをつなげることを目的に「前橋の素敵なうわさ」と題した地域の良い点を見つけ、他の人へと伝えるワークショップを行った。

今年度最終回となる前橋タイニーマーケットへの参加は、開催日直前に卒業論文を提出した 4 年生たちにとってはまさに、大学での 4 年間の学びを支えてくれた地域の方々への感謝を伝える場としてふさわしいものとなったと言えよう。

#### 4 地域での学びを通した学生たちの感想から

これまで紹介してきた地域におけるイベントや活動を経て、3・4年生の学生たちのリフレクションからは、1. コロナ禍における学生生活、2. 地域に関わることの意味、3. 地域の中での学び、4. 地域への愛着の形成の4つの特徴が見られた。

##### 4-1. コロナ禍における学生生活

2019年度の終わりからはじまった新型コロナウイルス感染症の拡大は、学生生活や地域での活動に大きな影響を与えていたことが学生たちのイベント参加後の感想から伺えた。

###### Case 1 4年生女性

コロナ前は、なんとなくまちで集まる場があり、そこに行けば、なんとなく自分と異なるコミュニティの人に会えていた。でもコロナ禍で人に会うこと・目的なしで動くことが規制(?)されていたため、なんとなくで人が集まるものが減っており、多様な人たちの話を聞きたい私にとっては自分と異なるコミュニティの人たちに会いづらくて大変だった。

###### Case 2 3年生女性

企画したイベントが無くなってしまった時の悔しさを学んだ。自分が担当した月ではなかったが、時間を見つけて準備をしていたため、無くなってしまった時にはかなり凹んだ。またその経験から、「このまま準備を続けていても、また無くなるのでは?」と考えてしまい、モチベーションが下がったこともあった。コロナがなければ、これらの体験はしていなかったと思う。

一方で、その影響はネガティブなものだけではない。学生たちの声の中には少なからず、そうしたコロナ禍以前とは異なる状況に対し、状況をポジティブに捉えるものも見られた。

###### Case 3 4年男性

コロナになって、計画していた東京での活動ができない中、地方での活動の機会が増えました。地方はつまらない、魅力がないと思っていた自分にとって、コロナで行動が制限された際は、絶望的な思いをしたけれど結果としては、コロナは自分にとって追い風であったように感じます。

##### 4-2. 地域に関わることの意味

また、学生たちの声から見えてきたのは、コロナ禍に関わらず、大学生が地域に関わることの意味についてのものであった。

###### Case 4 3年女性

私自身地域の人々とのつながりが薄かったため、地域の人々とのつながることの価値を感じることが出来なかったということです。私にとって「地域の人々が私たちのことをどう思っているのか」、ということは全くわからない状態であり、なかなか地域の人々との関わりを持つことが出来ませんでした。



地域に関わることの意味や地域に関わることで学べることは、アプリアリに学生たちに理解されているわけではなく、実際に地域で活動を行うことや上級生などの他の学生たちからの影響が大きいものであった。

#### Case 5 4 年女性

4 年が積極的にまちなかに行く様子やまちの人と関わる様子を見せることで、3 年生にも感じてもらえたら、と思いながらまちの人と関わっていました。だからこそ、「まちなかでわざわざゼミをする意味が分からない」と言う 3 年生がいた事がすごくショックでした。結構、割と、本当に衝撃でした。でも、tinymarket や中之条ビエンナーレといった場で、実際に企画側として参加することで、その意味を感じてもらえる機会が増えたとし、実際に 3 年生も感じてくれるのをみんなの感想を読んで知れて、本当に嬉しいです。自分が企画したものに人が来て、説明をして関わって、反応をもらえたり、その後も関わっていける。そうした経験の大切さ、重要さを改めて感じた年度でした。

Case4 にも見られるように我が国の多くの若者たちの中には自分の関わる地域に、はじめは地域愛着を抱くことができているものも多い(奥田ら, 2018)。しかしながら、上級生らと共に地域に関わることによってその態度には大きな変化が見られた。

#### Case 6 3 年女性

私は特別前橋市にゆかりがあるわけではなく、なぜ「まちなか」に出て活動を行うのか、その意味がよく分かりませんでした。しかし、タイニーマーケットや中之条ビエンナーレなどの活動を通し、まちなかに出るということがまず大事だなと身に染みて分かりました。大学外の方と関わりを持つ機会は、なかなか授業で学ぶことのできない経験で、まちなかに出ること自体に少し抵抗があった私は、このような地域の活動を通しその考えがガラッと変わったと感じます。

### 4-3. 地域の中での学び

コロナ禍という厳しい状況の中でも、むしろコロナ禍という状況であったからこそであるかもしれないが、学生たちは今年度の地域におけるイベントや活動からそれぞれに多様な学びを得たり、自信の変化を感じたりすることができていた。

#### Case 6 3 年女性

「人と関わることでこんなに楽しいんだな」と感じる事ができたことが 1 番の学びだと考える。

#### Case 7 3 年女性

1 番に感じることは見知らぬ人に話しかけに行くことが怖くなくなったことです。10 月のタイニーマーケットでのかぼちゃの長者などもあり、話しかけやすくなったのを感じました。

**Case 8 3年女性**

コロナの影響を1番実感したのが活動中というよりはその前段階の準備中でした。色々な制限がある中で企画をたててそれを実行することの難しさを、学生の内に体験出来たのは良かったと思います。

Case 6に見られる人と関わることへの喜びや、Case 7における自身の変化、そしてCase 8に見られるそこで得られるジェネリックスキルについての学びが見られた。

**Case 8 3年女性**

地域での活動の企画では、それをやる意味を考えたり、ゼミ生と試行錯誤を繰り返して、より良いものを目指したりする過程の中で、ゼミ生同士の価値観や考え方の違い、共通した思いに気づくことが出来て面白かったです。私はまだ「つながる」という段階から「つなげる」という段階に移行していませんが、ゼミでの活動を通じて、実際に地域の人々とつながったり、ゼミ生がつながっていく様子を見たりすることで、より深く「つながる」ことの意味や価値について考えることが出来ました。

加えて、Case 8に見られるような同級生といった身近な他者への多様性への気づきや、活動自体への意味や価値への言及、

**Case 9 4年男性**

自分はビジネスに興味があるので、まちなかでのイベントや中之条ビエンナーレなどお金になりづらい取り組みをなぜやるのかという疑問を持ったこともありましたが、しかし、実際に参加することで儲けを優先的に考えるのではなく、そこでの魅力や体験を通して地域での様々な取り組みが、世の中にいかに大事な役割を担っているかを肌で感じる事ができ、今後の人生にここで感じたことを、何かのヒントにしたいなと思います。

Case 9に見られるように、これまでの価値観の再構成。そして、そうした学びを自らの将来へとつなげる姿勢などが見られた。

**4-4. 地域愛着の形成**

最後に学生たちの感想から見られたのは、奥田ら（2016）でも明らかとなった大学生の地域愛着の形成であった。

**Case 10 3年生男性**

地域での活動を行ってみて、1番良かったと思うことは、大学外で、つながりができたことです。今まで課外活動をすることはありませんでしたが、そこにいた人たちと話をしたり、仲良くなって連絡先を交換することはなかったので、継続して関係を持つことのできる人たちとつながることができて良かったです。

学生たちに対しては、地域での活動に際して「多くのお客さんが来ることを目的とするのではなく、それ以上に「多くの人々とイベント後もつながること」を大切にしてください

い」と事前に伝えていた。学生たちはその意味を理解し、ただただ多くの集客が見込めるイベントや活動を行うのではなく「人とつながること」ということの意味や意義を活動以前より一段深く理解した姿が伺えた。

**Case 11 3年生女性**

人と繋がることの温かさを感じました。地域での活動を通して多くの人と知り合い、また会った時に挨拶をしてもらえることが嬉しく、その地域が自分にとって身近な場所になったように感じました。

地域の人々との関係性が生じていくことによって、地域は学生たちにとってより心理的に身近な場所となっていく。こうした学生たちの地域の人々や地域の中の様々な場に対する関係性の変化は学生たちの地域に対する見えや、居場所感さえも変化させていった。

**Case 12 3年生男性**

4月からのタイニーマーケットやまちなかゼミを通して、元々まちなかに住んでいて顔見知り程度の人だった人が今では立ち話をしバイトするくらいの仲になりました。「つながり」は元々あったのですが深いつながりでなく、浅いものだったのでまちなかで住んでる意味とゼミでの活動がうまく結びついたと思います。

**Case 13 4年生女性**

私はゼミで地域に関わる前まではイベントの時のみ参加するだけでした。ゼミでイベント以外の時に地域に行くという経験をしてみると、以前よりも気軽に行けるようになりました。なぜだろうと振り返ってみると、声をかけて頂けることによる居場所感だったり、誰かがいるかもしれないという期待感があったからだと思います。大学1・2年生のころは都会に憧れて「卒業したら絶対に東京に行ってやる!」と考えていましたが、今では前橋での生活が心地よいものとなりました。

特に学生たちの感想から明らかとなったのは、場所といった物理的な環境の重要性以上に、地域にいる「あの人」といった心理的な環境が学生たちにとって重要であるということである。Case13における「誰かがいるかもしれない」といった学生の感想からは地域での活動を通して様々な人々とのつながりが生まれ、同じ場所であったとしてもその場の意味が変化し、地域に対する愛着が形成されていくプロセスが見られた。

**Case 14 3年生男性**

深くかかると、さらに見えてくる。私が地域での活動を通して感じたことだ。地域での活動を通して、約1名のおじいさんと友達になった。そのおじいさんとの会話をしていく中で、今までの地域の記憶、これからの地域の移ろい、地域でのつながりなど、様々なお話を頂くことが出来た。これは、人との交流だけではない。何度も地域に訪れることにより、今まででは見えてこなかった地域の良さや発見などがあるのだと思う。1度だけでなく、何度も何度も関わる訪れることで、少しずつ地域での活動の意味を感じ取れてきたのでは、と思う。

Case 14 の学生の感想に見られるように、地域の中にははじめは学生たちには見えていない価値や、すぐには見えてこない学びなども多い。しかしながら、前橋タイニーマーケットのような定期的な地域イベントに参加し、何度も地域を訪れ何度も同じ場所で同じ活動を繰り返す、そうした反復の中でこそ、学生たちは人々とのつながりの意味や、地域に関わることの意味を学んでいくのであろう。

## 引用文献

- Engeström, Y., Engeström, R., & Kärkkäinen, M. 1995 Polycontextuality and boundary crossing in expert cognition: Learning and problem solving in complex work activities, *Learning and Instruction*, **5**, 319–336.
- 文部科学省中央教育審議会 2012 答申：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～, [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf)
- 奥田雄一郎 阿部廣二 三井里恵 2016 大学生の地域愛着と時間的展望, 共愛学園前橋国際大学論集, **16**, 157-164.
- 奥田雄一郎 呉宣児 大森昭生 2016 群馬県前橋市における地域認識と地域への愛着① 一定量のデータの分析, 共愛学園前橋国際大学論集, **16**, 145-156.
- 奥田雄一郎 呉宣児 大森昭生 2018 群馬県前橋市における地域認識と地域への愛着 (2) 大学生定量データの分析, 共愛学園前橋国際大学論集, **18**, 249-259.
- 奥田雄一郎 2018 社会文化心理学：まちなか学生プロジェクト：まちなか若者文化生成のための心理学的実践 (1), 共愛学園前橋国際大学論集, **18**, 261-278.
- 奥田雄一郎 2019 社会文化心理学：まちなか学生プロジェクト：まちなか若者文化生成のための心理学的実践 (2), 共愛学園前橋国際大学論集, **19**, 107-120.
- 奥西麻由子 2018 大学生の芸術祭参加の可能性:～「中之条ビエンナーレ」における実践を通して～, 美術教育学研究, **50**, 129-136.
- Pratt, M, L., 1992 *Imperial Eyes: Travel Writings and Transculturation*. London: Routledge.
- 山住勝広 エンゲストローム, Y. 2008 ノットワーキングー結び合う人間活動の創造へ, 新曜社.



**Abstract****Community-Based Learning for University Students  
during COVID-19 Pandemic**

Yuichiro Okuda

This paper reports on Community-Based Learning for university students during the COVID-19 Pandemic in 2021. Two events were selected as Community-Based Learning for students. First, “Maebashi Tiny Market” is a market that is held every month in Maebashi City. The students participated in “Maebashi Tiny Market” five times between June and December. Second, “Nakanojo Biennale” is a regional art festival held every two years since 2007 in Nakanojo-machi, Gunma Prefecture. More than 100 artists exhibit their works, perform theatre and physical expression, and give workshops in the town's natural environment, including an abandoned school and a hot spring resort. The students participated in “Nakanojo Biennale” two times in October and November. The students' narratives were characterized as follows: 1). Life of university students during COVID-19 Pandemic, 2). Meaning of Community-Based Learning, 3). Learning within the regional community, 4). Attachment to community.